

## 葉集を読む

松岡 隆子

近づくと見えて神輿の遠ざかる 菊池 京子

夏は祭り、祭りと言えば神輿、とりわけ神輿渡御は祭りのクライマックスである。大勢の担ぎ手に担がれた神輿がつぎつぎと町内を巡っていく。「ワッショイ、ワッショイ」、威勢の良い掛け声とともに神輿が近づいてくる。と思うと遠ざかってゆく。一進一退を繰り返しながら進む神輿の動きを活写して見事だ。担ぎ手と見ている人たちの熱気が一つになった祭町の昂りが伝わってくる。

夏の日の一本径の森に消ゆ 渡邊 章子

夏野に伸びる一本径とその先に拡がる緑の森。ふと東山魁夷の代表作の「道」を思い出す。魁夷の「道」はいきなり空に続きイメージは全く異なるが、構図の単純さに何か相通じるものを感じる。掲句の場合、森に存在感がある。日盛りの道をひたすら歩き続けてたどり着いた森は緑したたる緑蔭

だ。その先に森があるから人は歩く。静かに何かを語りかけている句だと思う。

蓴菜のするりと喉とほる時 小泉 恵子

先日富山の誌友の皆さんと先生ゆかりの「ホテル古志」で会食をした。松原越しに拡がる日本海を眺めながら、新鮮な海の幸を味わった。その時の一品に蓴菜があった。お吸い物だったか酢の物だったか記憶にないが、あのつるんとした食感覚えている。高級食品である蓴菜はめったに普段の食卓には上らない。さすが先生が定宿とされていた老舗旅館だと思った。

掲句は喉を通る時の食感をそのまま言葉に乗せている。「喉をとほる時」ではなく「喉（のんど）」とほる時」と詠むことで、独特の食感がより印象される。美味しいものを美味しく詠む。先生は美味しそうな俳句がお好きだった。

いくばくの余生ありしや花石榴 岡 美穂

人は誰しもある歳になると余生のことが気になりだす。若い時には無縁だった余生という言葉が、加齢と共に否応もなく身に迫ってくる。少しずつ足腰が弱り家に籠りがちになると次第に気弱になる。庭の石榴の花の艶やかな赤さが眼に沁みる。余生とは神のみの知るところ、小さな石榴の花の美しさを以て全うできたなら仕合せだ。美しく老いる。誰もそうありたい。